

同窓会

ニュース・レター 第11号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2012年3月20日発行



大阪大学会館（旧イ号館）講堂



改装された大阪大学会館（旧イ号館）



鷲田清一先生（前阪大総長）

目次

阪大総長を退いて—鷲田清一先生にきく—	P 2
定年退職される先生方からのメッセージ	P 5
森安 孝夫先生（東洋史学）、小林 茂先生（人文地理学）	
研究室今昔	P 6
中国文学研究室、演劇学研究室	
お知らせ	P 7

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

阪大総長を退いて

—— 鷺田清一先生にきく ——

昨年八月、鷺田清一先生は四年に及ぶ総長の大任を終え、大阪大学を離れました。文系研究者、しかも哲学者の総長の登場は阪大の歴史で初めてのことであつて、先生のご活躍は大きく注目されました。今回のニューズ・レターでは、無事に重責を果たされた鷺田先生をお招きし、柏木隆雄同窓会副会長が聴き手となつて、在任中の思いを伺いました。

(構成 三谷研爾)

柏木 まずは、この四年間ほんとご苦労さんでした。とにかく、阪大から文系の総長が出たというので、学内だけでなく、学外からも評価された。阪大は鷺田先生でよかったですねという声も、学者だけでなく、一般の人からもありました。飲み屋も含めてね(笑)。

学ありで、デイシプリン幅がとて広い。理系の学問全体でみると、その八割くらいは理学部でやつてるわけです。それと同じように、文学部には哲学あり、文学あり、芸術あり、歴史ありで、やっぱり幅が広い。そのなかで、ほくは哲学をやつてるわけですけど、哲学というのはいつてみれば専門がない。医学の哲学、科学の哲学、法哲学、政治哲学など、ありとあらゆる学問の基礎づけをするのが哲学です。そういう意味ではくの場合は、間口だけはすごく広がった。

柏木 これまで文系で総長になった人はなく、これからも当分ないと思うわけですけど(笑)、総長をされた経験から文学部を見ると、どんな感じですか。

総長の仕事って、とにかく挨拶と会議の連続なんです。で、ほくは挨拶するときに、何とはなしに広く学問とか大学とかそういうところから話しました。他の学部出身の方と違って、自分のデイシプリンから話すというところが少なく、それで空気をちょっと変えられたかな、と思いますね。

鷺田 文学部というと、小さな商店が軒を並べているみたいに、いろんな専門分野がごじょごじょあるイメージでしょ。でもね、学問の間口の広さからいうと、文学部は大学の半分くらいあるんじゃないやろか。間口の広さでは理学部も同じですよ。そこへいくと、医学や工学、法学や経済学は、間口を狭く構えて、そのなかでの専門性をとことん追求する学部です。

柄を取り上げて、はたしてそれがほんとにありふれたことかと問う。まず自分の経験、それから他の人たちの言葉を引きながら、だんだん問題のかたちを変えていって、でも最後にはきつちり出発点に立ち戻る。そのあいだに話にどんどん奥行きが出てくるのが、聴いてる者にはいへんよくわかります。

柏木 ひとりひとりの研究者がものすごい細分化されたテーマに取り組んでる。

柄を取り上げて、はたしてそれがほんとにありふれたことかと問う。まず自分の経験、それから他の人たちの言葉を引きながら、だんだん問題のかたちを変えていって、でも最後にはきつちり出発点に立ち戻る。そのあいだに話にどんどん奥行きが出てくるのが、聴いてる者にはいへんよくわかります。

鷺田 いや、そういう意味でなくて、学問のあり方としてね。理学部やったら、生物学あり、物理学あり、天文学あり、化学あり、数

学ありで、デイシプリンの幅がとて広い。理系の学問全体でみると、その八割くらいは理学部でやつてるわけです。それと同じように、文学部には哲学あり、文学あり、芸術あり、歴史ありで、やっぱり幅が広い。そのなかで、ほくは哲学をやつてるわけですけど、哲学というのはいつてみれば専門がない。医学の哲学、科学の哲学、法哲学、政治哲学など、ありとあらゆる学問の基礎づけをするのが哲学です。そういう意味ではくの場合は、間口だけはすごく広がった。

鷺田 そやけど、正直なところ、総長おえて一番ほつとしたのは挨拶がないことね。いろんなオープニングの式典とか、官界や財界とのフォーマルな会合とか、自分の言葉でない言葉で喋らざるをえない場であるじゃないですか。今まで絶対一度も使ったことのない言葉。こんな言葉自分では絶対使わへんとか、どうしてもこだわってしまう。それが通せん場面が多いことが、しんどかった。そういう場がなくなつた、つまり、地声で喋つてかまわないうつてというのが、なによりありがたいです。

自治都市の精神

—— 総長をお務めのあいだ、先生がとくに重きを置かれたことは？

鷺田 ほくが力を入れたことは、ふたつあります。

東京、京都、北海道、東北などに比べて、阪大には圧倒的に弱いところがあるんですよ。それは、大学が街なかにない、つまり街の魅力が大学を後押ししてくれるってことがない、いうこと。札幌にしても京都にしても、街の魅力の後押しが大きいんですよ。

柏木 東大の本郷もそうやね。

鷺田 そう。学生は、大学の授業は出んでも、その街に住んでるというだけで満足するところがあるんです。とくに京都は大学関係なくとも大満足。神戸もまた、港街の魅力が大きい。

柏木 京都では街の人も学生を大事にしてくれるしね。

鷺田 阪大の場合、それがいい。だから、阪大が他大学と対抗しようと思つたら、大学の魅力だけしかない。そこで勝負するしかないやあないという一念で、研究をやつてきた。そこで、ほくが考えたのは、やっぱり大阪の人に、大阪市民に阪大をもつと身近なものに

思つてほしい、ということですよ。阪大をサポートしようという気になつて貰えるように、一生懸命取り組みました。

もともと阪大は、旧帝大のなかで唯一、私学みたいな性格をもつてました。大学の土地も設立準備資金も当座の運営資金も、みんな大阪府と民間から応援いただいたわけですよ。それは大阪が元氣な時代、つまりモダン大阪の時代だったんですよ。

柏木 大阪はケチといわれるけど、合理的なんです。ほくは、古本屋なんかで値切りますけど、東京の偉い先生は値切らずに、ものすごい高い買物をしてはる。フランス行つてもね。でも古本屋との駆け引きは、店と客のあいだの本の知識、値段の知識の勝負なんです。そういうことができる店の主人も喜ぶし、信頼関係も生まれる。しかし東京では、値切るのはみつともないと思われてるんですよ。

鷺田 大阪では、明治以降の大事なもの、



全部寄付です。中之島図書館、中央公会堂、阪大と外大の用地、大阪城の天守閣、大川沿いの桜もそう。今やったら繁昌亭。そういうことは、ひとつも変わってないんです。

この間、ぼくが言いつづけてきたのはね、大阪は堺も含めて自治都市やったということですよ。江戸時代の大阪は、三〇万くらいの人人口のうち、武士は一人くらい。しかも天領やったから、その武士というのは江戸が各藩から送られてきたわけで、今でいうたら官僚です。それについて、区長レベル以下は全部民間なんです。選挙で選ばれた年寄方。つまりね、上方には自治都市の伝統、言いかえると大事なことはお上に任しておけへんという文化がある。

ぼくはね、恥ずかしい話やけど、五〇歳になってから、Eberallという言葉の意味を初めて知りました。どの辞書を引いても、「自由主義的な」という意味は、第一の意味では出てこない。第一はかならず「気まえば良い」「金離れが良い」。第二の意味は「寛容」、第三は「たつぷり」、あるいは「豊富」。それからようやく「自由主義的」。

柏木 もともと、「絆から解き放たれた」という意味やね。

驚田 そう、「解き放たれていること」。つまりね、Eberallには四つの意味があるけど、政治的な意味でのリベラルは、四番目なんです。で、名詞形もふたつある。みんなすぐにLibertyは思い当たるけど、もうひとつはなかなか思い当たらない。それがIberalityで、第一から第三までの意味をあわせ持つてるんです。そして大阪は、言葉のほんとうの意味で、Iberalityの街なんです。

柏木 アメリカの大学のリベラルアーツというところ、教養学科という訳語を当てますけど、じつは違う。本来は、宗教の桎梏を逃れた学問なんです。つまり、神学から解き放たれているがゆえに「自由」な学問、それがリベラ

ルアーツのおおもとの姿です。

驚田 そういうIberalityの精神こそ、いろんな意味での境界線を考える、また境界線を越えることを考えるときの鍵になるし、大阪の自治の歴史はこれからの社会の大きなモデルになると思う。そういうとき、大学と市民とがほんとにサポートしあわなあかん、そのためにはまず愛されんとあかん。そういうメッセージを大阪の市民に向けて強く発信していくというのが、ぼくがしたかったことです。その具体的なカタチが大阪大学21世紀懐徳堂。懐徳堂はおもに商家の小僧さん、番頭さんらが出入りする民間の機関ですよ。その懐徳堂の名前をふたたび掲げて、街に出ていったんです。大学がとにかく街に出ていて、身近に感じてもらい、支えてもらう。こちらからもいろいろ支える。そういう関係を創ることを、とにかく大事にしました。



ラーニング・commons (総合図書館本館内)



学生・commons (共通教育自然科学棟内)の一部「カルチエ(Quartier)」

リベラリティの空間

力を注がれたもうひとつとは？

驚田 それはね、学生にプライドを持たせたこと。さっきも言いましたけど、学生にとって都市の魅力は、すごく大きい。古都や港街といった都市イメージの後押しがない阪大の場合、そうしたものに大学を選ぶ際のモチベーションを期待できない。そこをなんとかして、これがあるから阪大を選んだ、と学生に言ってもらいたいし、また学生がそう言えるようにしたい、というのがぼくの思いです。それが結局プライドにつながる。

そのためにはもちろん、どんな教育をするかが大事なわけけど、教育を変えたいというのは、急にはできない。阪大ならではの教育・研究というのは、おいそれと実現できるほど簡単でない。

よく考えてみると、プライドというのは、自分のなかに他の人になんか才能や能力を発見し、それを誇ることは違うんです。ほれ見ろ、すごいやろ、というのをプライドというのは勘違い。プライドというのは、なにより自分を大事に思う心。他人を大事にし、また自分もこんなに大事にしてもらってると思う気持ち。つまりプライドって、他人から贈られるものなんです。

柏木 それは、尊敬語に似てるね。つまり、尊敬語というのは、相手を敬うために、相手に向かって使うけど、ほんとうは自分を敬うために使う言葉です。下品な言葉を使うことは、自分を卑しむことになる。相手を敬って始めて、自分の品位も敬うことができる。プライドもそれと同じ仕組みね。

驚田 そこで考えたのが、学生のためのフリースペース、つまりどう使うべきかは自分たちで考えなさい、という場所を作ること。文学部にいたときに感じていたけど、旧帝大のなかで阪大ほど、学生がみんな喋った

り、ばおっと時間をすごす場所が少ないところはない。そこで総長になってから、建物を新築したり改修したりするときは、学生のためのフリースペースを入れるようにお願いしました。文系総合研究棟(現・豊中総合学館)のピロティ、共通教育の自然科学棟内の学生・commons、総合図書館本館内のラーニング・commonsなどは、みんなそう。もし総長時代の多くの功績があるとしたら、そういう学生用スペースをいっぱい作ったことかな。学生は、自主的に読書会したりとか、イベントの相談したりとかできる。先生に頼んで授業してもらっても可、遊んでも、ものを食べても可。

文学部の各研究室は研究の場で、私語を慎むべしという気風が強い分野もあります。学生たちは、相談や議論、また他分野との学生との交流のために、そうしたフリースペースを大いに活用しているようです。

柏木 Eberallの空間、つまり「解き放たれる」空間が必要なんやな。

驚田 だからね、総長に任期が終わる半年前に阪大会館ができて、建物のうえから芝生敷の野外劇場スペースを見たときには、涙が出た。やっとな、学生の場所、たつぷり出来たなあと思つてね。それが、総長の四年間でいっばん嬉しかった。これまで阪大には、卒業してからでも思い出せるシンボリックな建物が多かったですからね。学生が、自分たちは大事にされていると思うには、スペースや建物といった「場」が欠かせへん。しかもそれは、クオリティの高いものでないとあかん。

柏木 つまり、本来ならバックにある都市が持つ機能を、大学キャンパスの中で創っていくことやね。

驚田 そう、阪大の場合は、阪大をタウンにせんとあかん。大学の中に街自体があるようにしないとね。

隠しもっている人間を容れておく、つまり受け入れておくスペースがあることですよ。いざというときには、大いに働いてもらわんといかんけど、普段はうるさいことは言わずに厚遇しとく。

鷺田 厚遇されてることに恩義を感じるからこそ、こころ一番で隠れた真の才能を発揮するわけです。古代中国の食客というのは、そういう人たちでしょ。

柏木 まさに鶏鳴狗盗ですわ。それこそ「Deba」の懐の深さであって、つまり物理的なスペースを用意することは精神的なスペースを用意するということを意味するわけです。

鷺田 ヨーロッパでいうと、それがhospitalityです。客を迎えるというのは、ひとつ間違えたらhostilityになる。そうならんように心を配るのが、liberalityやね。

地域で学生を鍛える

鷺田 総長の四年間で二番目に嬉しかったこと。それはね、石橋商店街が学生のためにスペースを提供してくれたことです。

ぼくがコミュニケーションデザイン・センター（SCD）の人たちに頼んで、石橋商店街とつきあって、商店街のいろんな行事とかに関わらせてもらったらどうやと言ったら、とくに理系の人たちにびつくりされました。阪大は世界を相手に研究で競う大学であって、商店街と一緒にやるなんて、アホかと思われたみたいですよ。

でもね、ぼくはそういうことが絶対必要やと思う。研究なんかは、みんな功名心があるから、放っておいても国際的な舞台でしのぎを削る。

ぼくらの世代というのは、やっぱりそれぞれ生まれたところで、街に育てられたわけですよ。ぜんぜん親戚でも何でもないけれど、近所で一緒にいるだけで、知らんふりしてるだけで、じつはちゃんと心配してくれてるおっちゃんとかがいる。そうやって街に育てられたところ

が、昔の人間にはあるんです。ところが、今の若い人には、そういう経験がない。

いまの若い人は、何をするかゼロから相談し、わあわあ言いながらものごとを作り上げて、最後はみんなで大馬鹿になって打ち上げして、でも打ち上げしながら次どうしようという相談が始まるなんて、経験したことない。つまり、事業をするっていうトレーニングを全然できてないんですよ。みんな、出来合いのメニューから選ぶだけ。かわいそうですよ。ぼくはそういう意味で、学生を鍛えるのには、ちばん良いのは、なんか面白いことしませんかとか、なんか手伝わして貰えませんかとか言うて、商店街に飛び込ませることやと考えたわけです。そういう教育の場所として、地域の社会でめっちゃくちゃ大きい。

そしたらSCDの人たちが中心になってやってくれて、街の人も大学に来てくれた。ほんまに嬉しかったのが、商店街のスペースを貸したげるから、ただで好きに使いたいと言うてもらえた。それに比べて学生が、阪大イシバシ映画祭で商店街の人を主人公にした映画撮ったりとか、インタビュに回ったりとか大いに動いてくれた。あれは、学生をもっとすぐタフにする、素晴らしい教育やったと思います。でも、最初は誰も理解してくれへんかったな。むしろ、世界でランキングを競う阪大の恥やと思われたのちがうかな。

そやけど柏木さんかて、若いとき商店街にお世話になってはるでしよう（笑）。

柏木 ぼくは刀根山寮のとき、ずっと寮祭に寄付してもらってました。だから、寮祭の始まりは、仮装行列で商店街をまわる。オッチャーン、オバサンから声がかかるんです。やっぱり石橋商店街は、そらあれやよ（笑）。

原点へ、未来へ

柏木 さきほどモダン大阪の話ができましたけ

ど、今の大阪はどうですか。

鷺田 大阪が「がめつい街」というイメージ一辺倒になったのは、第二次世界大戦後のことです。ほんとの大阪の文化を知ってる船場の人は、口を閉ざした。吉本的なカルチャーにたいして、こんなもの大阪とちがうと思いつながら、でも品があるから大声で反論することをしはらへんのです。また一般の人たちは、過剰なサービス精神があるから、たとえば東京の人が「粉もん」とか「お笑い」とか言うのと、それに悪のりして、付き合ってしまうんやな。その虚像に完全に乗っかってしまふ。大阪のほんとの文化、liberalityの文化は語り継がれないんですよ。それがなにより悲しい。だから、ぼくは大阪市で講演をするときは、とにかく大阪人にプライドを取り戻してほしいから、大阪の歴史はしっかり語った。

柏木 そういう大阪の街中に、大学が出ていくというのは、口では言えても実際におこなうのはなかなか難しいですわな。

鷺田 いや、だからこそ、大阪の市民とつきあうことが学生を鍛える。いろんなワークショップとかシンポジウムとか、専門家と市民が出会ういろんな企画あるけどね、大阪でうまくいこといったら全国どこでも通用します。大阪の人は、きついですよ（笑）。全然おもしろいとか、全然分かんへん、とかはつきり言われる。もう立ち往生ですよ。たとえば、阪大が京阪電鉄といっしょに作った中之島駅構内でのアートエリアBIというカフェがあるけど、駅で哲学カフェやったり、トークイベントやったりするつて、もう最悪のシチュエーション。でも、それ

が学生にはものすごい鍛錬になる。

副学長時代にSCDを立ち上げたとき、最初のフォーラムは阪急梅田駅のビッグマンの前でやりました。昼過ぎから夜まで、何万人もが行き交う空間で、公開対談を五つか六つやっただけです。ちよとど大相撲の千秋楽の日で、みんなビッグマンの画面に見とれてる。それでも耐えてやり続けた。そういうのは、最初なかなか理解してもらえなかつたけど、でも見てる人は見てるんです。

そしたら阪大での最終講義のとき、どなたか全然知らん市民の人が来て、この頃は阪大がえろう近う感じられるようになりましたと言ってくれた。あれもめちゃくちゃ嬉しかった。それが、昔の阪大と市民の関係、もつとさかのぼると懐徳堂と大坂町人の関係やったんやと、あらためて思ったわけです。

やっぱりぼくには性に合うんです、昔の街と大学との関係がね。それはまた、阪大のちばんの原点の精神とか心、あるいは阪大という大学の特徴やろうと考えてます。去年五月、阪大が創立八〇周年を迎えるのに「原点へ、未来へ」いう言葉を掲げたのは、まさにその思いなんですよ。

柏木 鷺田さんのあとは、医学部の平野俊夫先生が総長に選ばれて、阪大の新しい体制がスタートしたところです。平野先生にも、そういう大阪での学問の原点にある精神をさらに発展させていただきたいですね。

鷺田さん、今日はじつに貴重なお話を伺うことができました。お忙しいところ、ほんとうにありがとうございます。

プロフィール



鷺田 清一 (わしだ・きよかず)
1949年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。関西大学文学部を経て、大阪大学大学院文学研究科教授。大阪大学理事・副学長、同総長を歴任し、現在は大阪大学教授。専門は哲学・倫理学。おもな著書に「聴くこと」の力、「モードの迷宮」など。



柏木 隆雄 (かしわぎ・たかお)
1944年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。神戸女学院大学を経て、大阪大学大学院文学研究科教授、放送大学大阪学習センター長。現在は、大手前大学副学長。専門はフランス文学。おもな著書に「謎解き「人間喜劇」」、「交差するまなざし—近代文学とフランス」など。

定年退職される先生方からの

メッセージ

◆惜別の辞

東洋史学 森安 孝夫

私が阪大に赴任したのは三六歳の時であった。それから二八年間、ひたすら阪大文学部のプレスティージを上げることがめざしながら、東洋史研究室と共に歩んできた。その結果は大満足とまでは言えないが、まあまあ満足できるものであった。戦後にできた阪大東洋史の歴史の半分弱を体現したわけであるが、優秀な同僚に恵まれ、一致協力して育てあげた後進が今や世界の檜舞台で活躍しているのをまのあたりにできるのは、本当に嬉しいことである。もちろん研究者だけでなく高校などの教員の育成にも努力したが、卒業後にすぐ社会へ出る学生の人格形成にとってどれほど貢献できたのかという点になると、いささか心許ない。手を抜いたつもりはないが、どこまで思いが通じたのか分らないというのが正直なところである。しかし、阪大東洋史で卒論が書いた人は、それなりの自信をもって社会で活躍してくれていると信じている。

いまだに私は阪大人ではなく、大阪の笑い



森安 孝夫
福井県生まれ。東京大学文学部卒業、東京大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。専門は東洋史のうちでも内陸アジアの遊牧民族とシルクロードの歴史。博士(文学)、アジア協会(パリ)終身名誉会員。一般向けの主要著書「シルクロードと唐帝国」(興亡の世界史、第5巻、講談社、二〇〇七年)

には付いていけないが、大阪に来てよかったことはたくさんある。まずは三〇代後半にたまたま関西に揃っていた同世代の敦煌トゥルファン研究者五人で「ヤントン」という研究会を作り、そこで互いに切磋琢磨して各自が世界的な研究者に育ったこと(五人のうち一人だけ東京に戻った)、バドミンソンの大阪社会人リーグでかなり長くプレーできたこと、定年まで東洋史研究室の学生とソフトボールで交流できたこと、正倉院や古寺の多い京都・奈良によく行けたこと、関東や北陸では味わえなかったハモとフグの料理に出会ったことをはじめ、いろんなおいしいお店を知り、飲み友達が増えたこと等々、数えたらきりがない。さらに、高大連携を通じてたくさんの高校世界史教員とも知り合うことができた。大阪人にはならなかったが、大阪大学に留まっ

て本当によかったと心底思っている。

私の勤務してきた人文地理学教室は一九九五年に発足したが、金坂教授・高橋教授と教員の転出・退職がつづき、九七年四月に滋賀大学から小林健太郎教授が着任してその整備に当ることとなった。ただし同教授は重病による入院から復帰したばかりで、当時九州大学にいた私をもう一人の教員として指名した。これをうけて、大阪にきてお会いすると、たいへん痩せて、いつもの精神的な霧囲気がなく、しばらくして再入院され、そのまま七月に逝去された。私の選考のための委員会は、教授の病室で行われたという。

そのご人文地理学教室着任(九八年四月)が決定したが、旧日本学比較文化学の学生と人文地理学の第一、二期生がいるのに、教員は山田助手だけなので、九七年一〇月から半年間、併任教員として福岡から大阪に通った。ただし旅費が充分でなく、宿泊は京都の家の内の実家の世話になった。また共同研究室は日本学研究室の片隅だけで、学生は人文地理学に必要なスキルを学べず、卒論演習のレベルにもそれが反映していた。たいへんなどころにきてしまった、と思ったものである。

◆人文地理学教室の一四年半

人文地理学 小林 茂

大阪大学文学研究科の将来に不安がないわけではないが、東洋史研究室にはまだまだ発展の余地があるので、残された皆さんの健康を心から祈っている。

そのご堤助教教授、今里助手があいついで着任し、二〇〇一年四月によくや文法経本館にスペースが確保でき、他学部や他の教室が廃棄した書棚や戸棚、椅子をかき集めて研究室を発足させた。「これでやつと他大学の地理学教室と競争できる環境が整えられる」と、そのときのうれしさを忘れることができない。これ以降の二一年は、助教がいらない時期もあったが、本格的な人文地理学教室の実現にむけて、学内・学外のさまざまな資金をつかって、とくに多変量解析や地理情報システム(GIS)のソフトやデータ、パソコンの整備に心がけてきた。

今年二月初めの卒論発表会に駆けつけてくれた人文地理学第一、二期生のOB・OGは、すでに三〇歳代半ばとなって各方面で活躍している。あのころはひどい環境で、本当に申し訳なかったと彼らにわびたところ、「立派な教室になりましたね」といわれた。まだ小規模な普通の人文地理学教室にすぎないが、當時を思えば、この感想のとおりである。

ともあれ、大阪大学人文地理学教室の初期の整備はなんとか終了した。今後は、これらの蓄積を存分に使って、さらに優秀な卒業生、研究者が輩出するのを期待したい。



小林 茂
1948年名古屋生まれ。京都大学文学研究科博士課程中退、博士(文学)(京都大学)。文化地理学、文化生態学。著書に「外邦図：帝国日本のアジア地図」中公新書、「農耕・景観・災害：琉球列島の環境史」第一書房、編纂書に「近代日本の地図作製とアジア太平洋地域」大阪大学出版会など。

◆ 中国文学

中国文学研究室の歴史は比較的浅く、一九九二年に設置された比較文学講座が、文学部改組にもなつて、一九九五年四月に比較文学専修と中国文学専修に分離されたことに始まります。当初から深澤一幸言語文化部（現・言語文化研究所）教授に併任としてご協力いただいていたことが、開設当時は福島吉彦教授がおひとりで専攻をきりもりされてきました。その後、九六年十月に浅見洋二准教授（現・教授）が山口大学より



2012年予餞会にて

着任し、九九年三月に福島教授が定年退官、二〇〇〇年十月に高橋文治教授が追手門学院大学より教授として着任しました。

現在は浅見教授と高橋教授、及び二〇一一年四月より助教に着任した谷口の三人が、研究室の運営に当たっています。深澤一幸教授は唐代の詩歌を中心とする中国文化論、浅見洋二教授は唐宋の詩論を中心とする文学論、高橋文治教授は元明の白話文学を中心とする文体論をそれぞれ研究テーマとし、古典学の立場から研究・教育の現場に臨まれています。

また近年、大学院生や修士生とともに、大阪大学中国文学研究室編として『成化本「白兔記」の研究』（汲古書院、二〇〇六年）と『中国文学のチチエローネー中国古典歌曲の世界』（汲古書院、二〇〇九年）を刊行しました。これらの書物は、研究室内で行われている演習や研究会の成果です。

本研究室は、創設当時から学生数がさほど多くはありませんが、少人数故に学生間、及び学生と教員の間の関係が密接で、日々の授業や研究について、普段から活発な意見交換がなされています。（谷口高志）

研究室今昔

◆ 演劇学

演劇学研究室は、演劇を学問的に扱う日本では数少ない研究室の一つである。俳優や演出家などの実演家のための技術習得ではなく、およそ二千五百年の歴史を持つ人間の芸術活動についての理論的解明をめざしている。

研究室の歴史をふりかえると、一九七三年創立の文学部美学科に設置された「芸能史・演劇学講座」（一九七五年）を前身とし、日本の伝統芸能と海外に由来する演劇との二つの柱を掲げていた。当初は金沢大学文学部の室木弥太郎教授が併任教授として着任。翌年、室木教授は退任され、山崎正和教授が着任。十一年間お一人で研究室の基礎を築かれた。一九八七年には、天野文雄助教（一九九六年教授昇任）が着任され、芸能史分野を強化された。一九九五年に山崎教授が退任、翌年に永田靖助教授（二〇〇四年教授昇任）が着任。二〇〇七年には大阪外国語大学との統合により市川明教授が着任され、新しく文学研究科に設立された文化動態論アートメディア論コースとの兼任ながらも初めて三人体制となり、より充実した研究教育活動が実現した。二〇一〇年、天野教授が

退任。翌年、中尾薫（講師）が着任し現在に至る。

研究室は、一九九八年の大学院重点化にともない大学院文学研究科として改組された際、「芸能」と「演劇」の乖離という研究状況からの脱却をめざし、両者を一体のものとして把握する「演劇学研究室」と名称を改めた。時代や地域によって異なる演劇という事象の差異にもこだわりつつ、演劇の共通性・社会性をも見逃さないグローバルな視野に立脚した研究に力を入れている。

（中尾薫）



2001年夏合宿、京都「二條陣屋」前での集合写真

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄附いただければ幸いです

同封の
「教育ゆめ基金」
案内を
ご覧ください

文学部創立60周年（平成20年）の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。平成23年度は同窓生ならびに教職員の皆様より、総計50万円超のご寄附をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年度「教育ゆめ基金」寄付者リスト

石原 実	大村 睦子	小林 正人	田島 智子	榎本 裕之	山上義太郎
内村 勝	小笠原幹雄	坂川 佳子	中村 元保	森田小夜子	山口 聡
大西富美子	加地 宏江	志水紀代子	藤岡 穰	森田 洋理	吉田 高重
大野篤一郎	片山 剛	白土 芳人	前田 均	森安 孝夫	渡辺 義嗣

(敬称略・五十音順)

◆「教育ゆめ基金」の支出（平成23年度）



- ・エラスムス・ムンドゥス・プログラム留学生の授業料補助：288,000円
- ・エラスムス・ムンドゥス・プログラム留学生のための情報環境整備：約60,000円
(平成24年3月3日現在の残額：3,128,286円)

※エラスムス・ムンドゥス・プログラムとは、国際的な教育をおこなうためにEUで作られた制度で、大阪大学文学研究科は2008年から「域外パートナー」としてこれに参加し、学生の交換留学や教員の研究交流をすすめています。

市 大樹さん 桑木野幸司さん

おめでとうございます



桑木野 幸司
(くわきの・こうじ)

プロフィール
1975年静岡県生まれ。1997年千葉大学工学部卒業、1999年東京大学大学院工学研究科修士課程修了、2007年ピサ大学歴史学部美術史学科博士課程修了（Ph.D）。2011年3月までKunsthistorisches Institut in Florenz 研究生。2011年4月大阪大学大学院文学研究科准教授。初期近代西欧の建築・美術・思想史を研究。



市 大樹
(いち・ひろき)

プロフィール
1971年愛知県生まれ。1995年大阪大学文学部卒業、1997年大阪大学大学院博士前期課程修了、2000年大阪大学大学院博士後期課程単位修得退学（2001年学位取得）。2001年奈良文化財研究所研究員。2009年大阪大学大学院文学研究科准教授。日本古代史、特に木簡・交通制度を研究。

さる二月二十七日、文学研究科の市大樹准教授（日本史）と桑木野幸司准教授（アート・メディア論）が、日本学術振興会賞を受賞されました。これは優れた成果を挙げて将来を嘱望される四十五歳未満の若手研究者に与えられる賞で、今年度が第八回目の授賞となります。日本全国で文系・理系あわせて二十四名の方々が選ばれましたが、人文・社会科学関係は六名でした。そのうちの二名が、阪大文学研究科のスタッフですから、これはいよいよのことです。そもそも阪大では、文系研究者がこの賞を受けるのははじめて、二名の同時受賞ももちろんはじめてです。しかも市さんは、とりわけ優秀な若手研究者を表彰する日本学士院学術奨励賞も受けられました。ダブル受賞ということで、まことに喜ばしいことです。

市さん、桑木野さんとも最近文学研究科にいらした、まさに期待の俊英。榮譽を受けられたおふたりに心からお祝いの言葉を申し上げ、また今後のいっそうのご活躍を楽しみにしたいと思います。

事務局便り

●お知らせ

◇『文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿』(二〇二二年版)について

昨年来、『文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿』(二〇二二年版)の発行のために、(株)サラトに正式に委託して、名簿作成の事務処理、調査はがきや電話による問い合わせ等を行って参りました。(株)サラトは、会員名簿の作成では三十年の実績があり、また財団法人日本情報処理開発協会からプライバシーマークの認定を受けております。本会同様、個人情報保護の制約を遵守し、より充実した名簿作成に向けて細心の注意を払っての作業をお願いしております。

二〇〇五年の個人情報保護法の施行、また近年のインターネットの急速な普及によって、個人情報の扱いはますます慎重を要するものになっております。そのなかで、同窓生の皆様、文学部・文学研究科の皆様のご理解ご協力によりまして、ようやく発行にたどり着いた次第です。ご理解ご協力を厚く御礼申し上げます。

なお、今後とも定期的に名簿の改定版を発行する予定でありますので、今後とも変わらぬご理解ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

また、名簿の購入希望は調査はがきで承り、既に締め切りましたが、追加のご購入は随時承っております。販価(五千円)＋送料(百六十円)でお送りいたします。ただし、名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、同窓会終身会費(二万円)をお支払いいただいた方には名簿二冊を謹呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。

ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご購入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。

【写真集、名簿、終身会費のお支払い】

口座番号 00940・1・79043

加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻・専修・専門分野名をご記入下さい。

●お願い

◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

◆事務局メンバー

事務局 長	和 田 章 男 (S五五)
総 務	入 江 幸 男 (S五一)
会 計	岡 田 禎 之 (S六二)
企 画	西 田 有 利 子 (S五六)
広 報	村 田 路 人 (S五二)
	市 大 樹 (H七)
	三 谷 研 爾 (S五九)
事務局 補 佐	岡 田 裕 成 (S六一)
	宮 川 真 弥 (H二二)
事務局 補 佐 (Web 担 当)	松 岡 佳 世 (H二二)

●住所：〒560-0803 豊中市待兼山町一番五号

●ホームページアドレス：<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

●事務局メールアドレス：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp